

# 授業づくりに活きる学習評価

秋田県生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学。兵庫教育大学大学院講師・助教授・教授などを経て、現職。中央教育審議会専門委員、中央教育審議会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等」協力者、文部科学省「教育研究開発企画評価会議」委員、文部科学省「研究開発学校」運営指導委員、文部科学省「道徳教育に係る学習評価の在り方に関する専門家会議」委員、国立教育政策研究所「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者、独立行政法人大学入試センター「全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会」委員などを歴任。



関西学院大学教授・  
放送大学客員教授  
**佐藤 真**  
(さとう しん)

## 1 これからの学習評価の重要性

平成31（2019）年1月21日に中央教育審議会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」、平成31（2019）年3月29日に文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善について（通知）」が示された。新学習指導要領が育成を目指す「資質・能力の三つの柱」を生徒に着実に育むためには、新しい「指導と評価の一体化」の充実とその実質化は欠かせないものである。

しかしながら、いまだに学期末

や学年末における事後的な評価のみに終始している等の評価と評価の課題や問題が散見される。学習評価は、生徒の学習改善につながるものにしていくこと、かつ教師の指導改善につながるものにしていくことが肝要である。

本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を中心に、授業づくりに活きる学習評価について述べてみたい。



## 2 観点別学習状況評価の新3観点を精確に理解する

### (1) 「知識・技能」

「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通して個別の「知識・技能」の習得状況について評価を行うこととともに、それらを既有的「知識・技能」と関連づけたり活用したりするな

かで他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり技能を習得したりしているのかを評価するものである。

とりわけ「知識」は、個別の知識の習得状況という「事実的な知識」に加え、それらを既有的知識・技能と関連づけたり活用したりするなかで、他の学習や生活の場面でも活用できるという「概念的な理解」も評価するものである。したがって、「理解」がなくなったということではない。

また「知識」には、「宣言的知識」と「手続き的知識」があるが、「技能」は行為に関する知識ともいえ、反復練習等によって意識せずに秩序だった行動が可能になる知識をも含むものである。このことから、技能は、「手続き的知識」と捉えられる。したがって、言葉によって説明可能な知識としての「宣言的知識」とともに一体的な観点として「知識・技能」とされたので

ある。

新しい知識が既得の知識と関係づけられて構造化されたり、知識と経験が結びつくことで身体化されたりすることによって、さまざまな場面で活用できるものとして構造化され、転移可能で汎用性のある概念が獲得される。ぜひ探究的な学習や試行錯誤しながらも意味ある活動に関わる学びを多く取り入れた授業を展開してほしい。

## (2) 「思考・判断・表現」

「思考・判断・表現」の評価は、生徒が「知識・技能」を活用し、

課題を解決する等のために必要な「思考力、判断力、表現力」等を身につけているのかを評価するものである。ただし「知識・技能」を活用し、課題を解決する等には、以下の三つの「知識・技能」を活用して課題を解決する過程があることを理解し、運用することが必要である。

すなわち、

ア 事物の中から問題を見だし、その問題を定義して解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の

問題発見・解決につなげていく過程。

イ 精査した情報をもとに自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程。

ウ 思いや考えをもとに構想し、意味や価値を創造していく過程、の三つである。

なお、(3)「主体的に学習に取り組む態度」は、次項で詳述する。

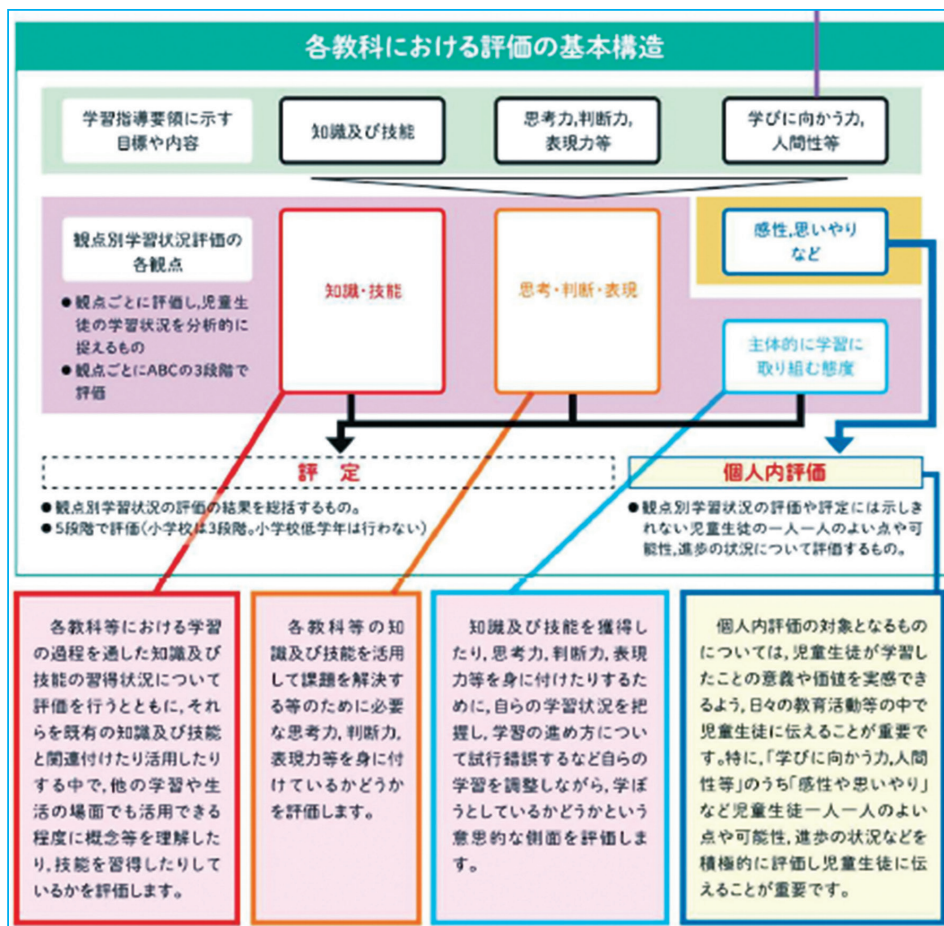


図1 主体的に学習に取り組む態度のイメージ



### 3 「主体的に学習に取り組む態度」は2側面で評価する

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、第一に、生徒の「メタ認知」を重視して学習を行う過程で学びを自己調整する機能を発揮していることを見取り、評価する。

すなわち、生徒が「知識及び技能」を獲得したり、「思考・判断・表現」等を身につけたりするために、学習状況をモニタリングし、学びの進め方について試行錯誤し

たり自己調整したりする等、学習の自己調整を図って、よりよく学ぼうとしているかという意思的な側面を見取り、評価する。

第二に、「知識・技能」を獲得したり「思考・判断・表現」等を身につけたりすることに向けて粘り強い取り組みを行おうとしているかという意思的な側面を評価する。すなわち、生徒が自己調整を行いながらより良く学ぼうとする意思的な側面と粘り強い取り組みを行おうとする意思的な側面の、二つによって評価するのである。

価(評定ではなく)」として、コミュニケーションを重視した対話型評価 (interactive assessment) を充実させることである。認知能力とともに非認知能力をも重視し、自己肯定感をもって前を向いて学び続ける「活力ある学力」を評価するのである。そこでは、「生徒の真価(「知識・技能」を獲得したり、「思考・判断・表現」等を身につけたりしているか)を認め、励ます」評価である「アプリーション (appreciation) 評価」をしたい。

すなわち、今後は「主体的に学習に取り組む態度」の評価によって、生徒の学習が粘り強く継続して学び続け、その学びの過程で自己の探究を自覚的に捉え自己調節をしていくという、自己学習能力の根幹にある「自己評価能力」の形成こそが重要である。ぜひ「アプリーション評価」で、生徒の真価を認め励まし、自己学習能力の形成につながる「自己評価能力」を育む授業になることを期待したい。

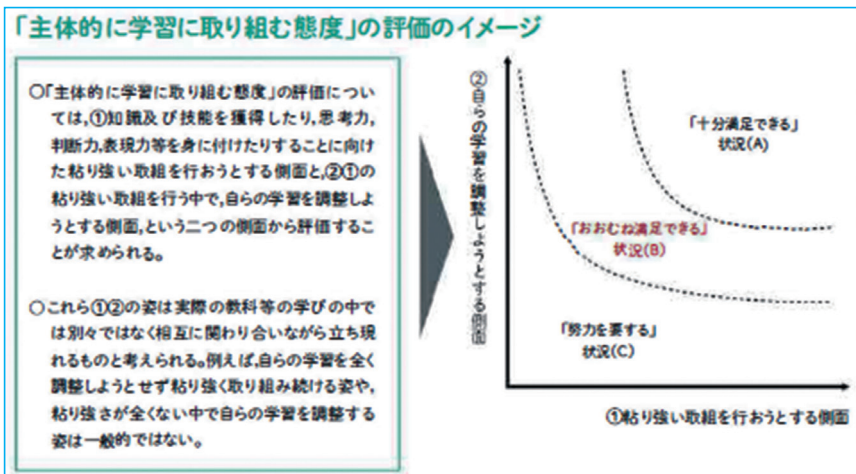


図2 各教科における評価の基本構造



### 4 生徒の自己学習能力の育成に資する学習評価をする

現在の学習評価は、形成的評価 (formative assessment) と

して授業過程における評価を重視している。とりわけ「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、学びのプロダクトだけでなく、学びのプロセスを重視する。

特に、授業づくりに活かすためには、「生徒を伸ばそうとする評

<引用・参考文献>

佐藤真「連続講座・新しい評価がわかる12章」、『学校教育・実践ライブラリ、Vol.1-12』ぎょうせい、2020年。